

第 45 回 関東地区 公立中学校
修学旅行研究発表会
研究紀要



期 日 : 平成 2 1 年 1 1 月 1 6 日 (月)

会 場 : 小山市立文化センター

主 催

関東地区公立中学校修学旅行委員会

財団法人 全国修学旅行研究協会

後 援

栃木県・小山市・茨城県・群馬県・埼玉県・千葉県 各教育委員会

栃木県・茨城県・群馬県・埼玉県・千葉県 各中学校長会

研究発表会の趣旨

修学旅行は近年、訪問地や体験の幅が広がり、その形態が多様になってきました。しかし、望ましい集団活動、個人的資質の向上、社会性の涵養、自主性・実践性の育成、人間としての生き方への志向といった“修学旅行の価値”は変わっていません。まさにこうした価値を追究していくことが修学旅行の目的なのです。その意味で、何を体験させるかということ以上に、体験によって何を学ばせるのが大切なのです。

現在、学校教育の中心課題となっている「生きる力」とは、「生涯において生起される課題を自ら解決できる力」だと考えます。その力を育成するために教科、道徳、総合的な学習の時間、そして特別活動があります。教科は学問から、道徳は生き方・あり方から、総合的な学習は身の回りを取り巻く課題から、特別活動は自治的活動や集団づくりといったように、それぞれの領域を生かした課題をもとに追究していくことが求められています。

修学旅行についても、「生きる力」を育成する観点から、自治的・集団的活動をもとに、学校では経験できない出会い・ふれあい・発見を通して喜びや感動を味わい、“学びの創造”に取り組む必要があると思います。つまり学びの価値を与えていく意図的な学習計画があるべきです。

修学旅行は教育的行為であり、学習を中心にすえなければなりません。その学習をより魅力付けるのが子供の感性への働きかけです。学校教育の最大の課題が「人間としてのいき方についての自覚を深め、これからの自己を一層生かす能力を養う」ためには、欠かせないのが修学旅行です。旅に出て、未知なる世界に触れ、文化・自然・人々との出会いは多くの感動を呼びます。その感動の基本となるのが体験です。体験を感動に高める要素が感性です。

今日、各学校は修学旅行を実施するにあたり、新しい教育の趣旨を汲み取り、こどもたちの主体性を生かし、さらには教育効果をより高めるために関係者や関係機関との連携を図る中で、創意に満ちた取り組みをされていることと思います。

このような趣旨から研究発表会の主題に「感性をはぐくむ修学旅行の探究」を掲げ、各県教育委員会をはじめ、関係教育諸機関のご協力とご支援により、関東地区公立中学校修学旅行研究発表会を開催し、修学旅行の研究を深めることは大きな意義があることと考えます。

目 次

1	研究発表会次第	1
2	あいさつ	
	関東地区公立中学校修学旅行委員会会長	清水 昭 二 ... 2
	財団法人 全国修学旅行研究協会理事長	中 西 朗 ... 3
3	研究発表	
	主題 「感性をはぐくむ修学旅行の探究」	
	・発表 1	5
	「世界遺産の地で 感性を磨く修学旅行のあり方」	
	- クラス別茶会(京都・奈良)と献茶式(奈良「春日大社」)をとおして -	
	上三川町立上三川中学校	戸 倉 文 夫 校長
		仁 平 和 希 教諭
	・発表 2	13
	「心に響く修学旅行のあり方」	
	- 平和への想いを歌声にのせて IN 広島 -	
	佐野市立西中学校	飯 塚 雅 美 教諭
		元 田 勝 章 教諭
4	指導講評	35
	栃木県教育委員会学校教育課 指導主事	山 岸 一 裕 先生
5	研究発表のあゆみ	36

研究発表会次第

- 1 大会主題 「感性をはぐくむ修学旅行の探究」
- 2 日程
 - (1) 受付 (12:45～13:10)
 - (2) 開会行事 (13:10～13:35)
 - ・ 開会のことば
関東地区公立中学校修学旅行委員会運営委員長 宗 像 茂
 - ・ 主催者あいさつ
関東地区公立中学校修学旅行委員会会長 清 水 昭 二
財団法人全国修学旅行研究協会理事長 中 西 朗
 - ・ 来賓祝辞
栃木県教育委員会教育次長 古 澤 利 通 様
小山市教育委員会教育長 清 水 悟 様
 - ・ 来賓及び指導者紹介
 - (3) 関修委活動報告(13:40～13:55) 関修委研究委員長 森 田 良 司
 - (4) 研究発表 (14:00～15:00)
 - ・ 発表 1
「世界遺産の地で 感性を磨く修学旅行のあり方」
- クラス別茶会(京都・奈良)と献茶式(春日大社)をとおして -
上三川町立上三川中学校 戸 倉 文 夫 校長
仁 平 和 希 教諭
 - ・ 発表 2
「心に響く修学旅行のあり方」
- 平和への想いを歌声にのせて IN 広島 -
佐野市立西中学校 飯 塚 雅 美 教諭
元 田 勝 章 教諭
 - (5) 休憩 (15:00～15:15)
 - (6) 研究協議 (15:15～15:45)
 - (7) 指導講評 (15:50～16:10)
栃木県教育委員会学校教育課 指導主事 山 岸 一 裕 様
 - (8) 閉会行事 (16:20～16:25)
 - ・ 閉会の言葉
栃木県中学校長会修学旅行部部长 宗 像 茂
 - ・ 諸連絡



研究発表会の開催にあたって

関東地区公立中学校修学旅行委員会
会長 清水 昭二
(栃木県宇都宮市立旭中学校長)

この度、第45回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会が、多くの皆様のご尽力により、ここ小山市で開催されますことを心からお喜び申し上げます。

ご記憶に新しいことかと思いますが、今年の修学旅行は各学校とも「新型インフルエンザ」への対応に振り回されました。各学校とも、いまだかつて経験したことの無い事態に、その対応に大変苦慮いたしました。その中で、何とか大きな事故もなく、修学旅行が終わったことは、各学校の校長先生や担当の先生方のご努力に負うところが大きいものと感謝申し上げます。同時に、各県からのデータの収集と提供や、その後の修学旅行専用列車への対応など、事務局はじめ関係者の皆様の的確な対応に対しても改めて感謝申し上げます。

さて、修学旅行は中学校3年間において、最大の思い出の一つといっても過言ではないでしょう。そのため、企画運営に多くの教師と、さらに生徒が加わり実施されているのが現在の形かと思えます。生徒の自主性を伸ばすなど内面的な面からも、また普段と違う姿が見える生徒理解の面からも、修学旅行は大変貴重な教育活動です。

このような観点から、修学旅行をより一層充実したものにするため、各学校での実践的研究とともに、そのすばらしい取り組みをお互いに共有するための場の設定が重要になります。

本研究発表会は、各校の実践的な取り組みを互いに共有し、より良いものを目指す学びあいの場として、重要な役割を果たしてきました。

本日の研究発表会では、「感性をはぐくむ修学旅行の探究」の大会主題の下、「世界遺産の地で感性を磨く修学旅行のあり方」「心に響く修学旅行のあり方」と題した二つの発表があります。そして、引き続き研究協議が行われます。実践事例に学ぶとともに、参加者の皆様方からの活発な意見で協議が行われ、各校の今後の取り組みの一助になれば幸いです。発表校の先生方には、ご多忙の中準備をしていただき、たいへんありがとうございます。

最後になりましたが、研究発表会の開催にあたり、ご指導・ご助言をいただきました栃木県教育委員会をはじめ小山市教育委員会、栃木県中学校長会、運営に携わった財団法人全国修学旅行研究協会、県中学校長会修学旅行部、その他ご協力を賜りました多くの方々に厚くお礼を申しあげ私のあいさつといたします。



第45回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会の 開催に当たって

財団法人全国修学旅行研究協会
理事長 中西 朗

第45回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会が、水と緑と大地のゆたかなまち小山市で開催できますことに心から感謝申し上げます。これもひとえに、関東地区公立中学校修学旅行委員会のご尽力はもとより、各県の教育委員会・中学校校長会、特に開催地の県及び市の格段のご支援をいただきました結果です。この機会をお借りして、深く御礼申し上げます。また、ご多忙の中ご参集いただきました皆様、今日一日よろしく願いいたします。

さて、今回の研究発表会のテーマは、「感性をはぐくむ修学旅行の探究」です。先日、文化庁長官にご就任なさいました玉井日出夫様は、「子供の発達という視点から、感性が重要です。例えば、自然体験が大切なのは、感性に通じるものがあるからです」と述べられておられます。これから、教育における感性の重要性が一層叫ばれると思います。

学校は今、学力充実という課題を担っていますが、同時に心の充実が求められています。生涯にわたる〔生きる力〕として、豊かな知識や卓越した技能が感性と一体的に働くことが重要です。すなわち、「感知合一」という考え方が求められているといえるでしょう。

すなわち、〔生きる力〕の育成には、豊かな知識と感性との融合化が重要な鍵をにぎっています。特別活動そして修学旅行の意義づけも、この点にあると思います。

今回の研究発表も、私たちに多くの示唆を与えてくれるでしょう。上三川町立上三川中学校の奈良春日大社での献茶式も一人ひとりの子どもたちの心を震わせた事でしょう。静けさの中で、じっと自己を見つめる佇まいが想像できます。きっと、これからの生活に深く残る修学旅行であったと思います。また、佐野市立西中学校の平和への思いは、歌声として世界の隅々まで届いたことでしょう。私の広島で過した小学校時代の友の御霊にも届いたことでしょう。

最後になりましたが、ご多忙の中、研究調査にあられた先生方、ご来賓としてご臨席いただきました栃木県教育委員会教育次長 古澤利通 様、小山市教育委員会教育長 清水悟 様、指導講評をいただきます栃木県教育委員会学校教育課指導主事 山岸一裕 様に熱く感謝申し上げます。

この会が盛会裏に終わりますことをお祈りして、ご挨拶とさせていただきます。

「世界遺産の地で感性を磨く修学旅行のあり方」

クラス別茶会（京都・奈良）と献茶式（奈良「春日大社」）を通して

指導 上三川町立上三川中学校長 戸倉 文夫
教諭 仁平 和希

はじめに

- 1 本校で伝統文化「茶道」を、なぜ教育活動に取り入れたか。

研究の内容

- 1 地域と学校の実態
- 2 研究の概要
- 3 取り組みの実際
- 4 成果と課題

おわりに

第4 5 回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会

大会主題 「世界遺産の地で感性を磨く修学旅行のあり方」

クラス別茶会（京都・奈良）と献茶式（奈良「春日大社」）を通して

栃木県河内郡上三川町立上三川中学校長 戸倉 文夫
教諭 仁平 和希

はじめに

1 本校で伝統文化「茶道」を、なぜ教育活動に取り入れたか。

(1) 学校の実情から

課題克服と地域から学校の信頼回復を図り、生徒の良さを引き出し、さらに学校の力を高めるため

(2) 「生きる力」を育てるため

第15期中央教育審議会第1次答申より、第1部「今後における教育の在り方」(3)から「体験活動は、[生きる力]をはぐくむ基盤」として体験活動の重要性を述べている。

(3) 国の教育の理念から（時代の要請）

教育基本法より（平18 12・22）教育の目的及び理念（教育の目的）の第二条の五から、伝統と文化を学び、尊重していくことは、国際人としての日本人を育てることにつながるとともに、豊かな心を育てていくためには今後ますます必要なものとなってくるものと考えられる。

以上、学校の実情、生きる力の育成、我が国の教育の理念の3点から、本校の教育活動に伝統文化「茶道」を取り入れ、修学旅行で日頃の取り組みを実践することとした。

研究の内容

1 地域と学校の実態

(1) 本地域の実態

本地区は、都市近郊にあり、近年、町北部に大型ショッピングモール、また北関東道のインターチェンジができるなど商業化が進むとともに交通の要衝となっている。

生徒は、概して素直で勤勉であり、活気に溢れている。

(2) 本校の生徒の実態

活力があり、積極性があるが、生活面に課題をもっている保護者が多い。問題行動が多発した時期もあったが、伝統文化「茶道」を教育活動に取り入れることにより、課題解決の大きな力となりつつある。また、深く「茶道」を学ぶことにより、生徒一人一人の内面からの陶冶がなされつつある。

2 研究の概要

「茶道」を授業で校長が指導し、学年末には、「クラス別茶会」を実施している。さらに「茶道愛好会」を中心に、町文化祭等で茶会を開き、また修学旅行では毎年参加者全員での「クラス別茶会」「交流茶会」を実施している。これらの活動を通し、生徒の心を耕し、学校の質を高め、さらに今年度は、「世界遺産」への献茶式体験で、生徒の感性を磨いた。

3 取り組みの実際

(1) 研究のねらい

日本に古来から伝わる伝統文化「茶道」を教育活動（授業、授業外活動）に取り入れることにより、生徒の心を耕し、高め、生徒のよさを伸ばす。

(2) 取り組みの内容

ア 「茶道」の授業

各クラス年間10時間程度を各学年の「総合的な学習の時間」の共通指導事項として取り組んでいる。

茶道の授業の内容としては、各学年共通で、なぜ茶道を学ぶのかを毎時間説明してから授業に入ることにしており、単なる所作だけでなく、生徒の心を内面から変容させるための手だてを工夫している。（「和敬清寂」の心を全員に持たせる）

また、所作については、立ち方、座り方、歩き方から始まり、お辞儀の仕方（真・行・草）、帛紗のたたみ方、棗、茶杓の拭き方、三段の構え、茶筌とうじなど点前の基礎を徹底して身に付けさせることにより、道具を大切に扱うこと、他の人のことを考えた行動をすることなど茶道の授業で学んだことを実際の生活に生かすことを目標としており、点前全部が出来ることを目標とはしないこととした。実際に、年間10時間程度ではお点前を覚えるまでは難しい。しかし、生徒の代表（茶道愛好会に所属しているもの）は、完全に点前まで出来るようになっており、「クラス別茶会」では、茶道愛好会の会員がお点前をし、生徒全員が、お運びを実践している。

「お運び」の稽古については、菓子の運び方、茶の運び方を交代で実践し、心を込めて運ぶことがいかに大切かを実際の茶会の場面で体験させている。また、「お客ぶり」についても、お茶を点ててくれた人への感謝の気持ちや隣の人への気遣いとしての所作、言葉なども覚えさせ、茶会の時だけでなく、普段から「お先に。」などの相手を思いやる言葉が自然に出てくるように指導している。



（右：1年生の「茶道」の授業）

イ 「町文化祭」、「町中学校総合文化祭茶会」での「茶会」の実施

毎年、行われる町の文化祭に、「茶道愛好会」の会員が茶会を開いている。

中学生の点前を楽しみに多数の方が町内外から来場して頂き、生徒たちの励みになっている。また「上三川町中学校総合文化祭」では、新しくできた町営のスポーツ施設内で、書道や絵画の展示とともに、茶会を開き、町内の中学生や地域の方々にも中学生の茶道での所作やすばらしさをアピールしている。

ウ 地域との連携で「野点茶会」

学校で、茶道の授業を進め、また町文化祭で、茶会を開くなど、広く一般の方に茶を飲んで頂き、学校の茶道の取り組みが知られてきたとき、地域の方から城址公園で茶会を開いてはどうかという提案があり、実施したところ、多数の町民に来て頂き、自然の中での茶会の良さを満喫して頂いた。来場者のアンケートにも毎年開催してほしいという要望があった。

(野点茶会の様子)



エ 修学旅行先で「クラス別茶会」を実施

平成18年度から、3年生の京都・奈良方面への修学旅行で、宿泊先でクラス別茶会を毎年、実施している。平成18年度は、本校が茶道を「総合的な学習の時間」に取り入れてから初年度だったこともあり、希望者のみが茶会に参加した。平成19年度は、京都市教育委員会の先生方もお招きしての茶会となった。生徒のきちんとした点前、また参加した生徒の客ぶりなど

(クラス別茶会での生徒の点前)



生徒の「茶道」に対する姿勢に高い評価を頂いた。

毎年、総合的な学習の時間の集大成としてクラス別茶会を実施しているが、生徒は古都の雰囲気を味わいながら、落ち着いた気持ちで茶会に参加し、心ゆくまで古都の情緒に浸ることができ、その後の宿舎での生活も落ち着いて過ごしている。

修学旅行は、その特質上どうしても寺社仏閣をいくつも忙しくまわる傾向にあるが、一日の最後に茶会を開き、心を落ち着かせ、自分を省み、一日を思い出す時間を持つことは、修学旅行に深みを持たせるとともに、感性をさらにとぎすませる貴重な時間になると考えられる。生徒へのアンケートの回答にも「友達と一日の最後にゆっくりした時間を持てたことはとてもよかった」と述べている。

友の点てる茶を飲みながら日中の出来事を思い出しじっくりと省みる時間は、感性を育てるのみならず、茶道の所作を通じての規範意識の確立にも繋がり、次の日の団体行動へも必ずプラスになる。

実際、平成18年度の修学旅行から毎回、見学先で態度に関してお褒めの言葉を頂いており、茶道(茶会)が確実に生徒の心に変化を生じさせ、また規範意識や物腰、態度に良い影響を与えている。



さらに感性が高まるよう今後もクラス別茶会を継続させて行きたい。

オ さらに「交流茶会」へと深化

平成20年度は、京都市立下京中学校の生徒と職員の皆様に宿泊先に来ていただき、交流茶会を持った。そして、平成21年度は、修学旅行初日に、京都市立西京高校附属中学校を訪問しての交流茶会を実施した。茶室での交流茶会、そしてホールの立礼席での交流茶会実施し、お互いの茶道に対する意見を交換するとともに、親睦を図り、意義ある交流茶会となった。



(京都市西京高校付属中と交流茶会)

カ 世界遺産への献茶式と発展

修学旅行二日目は、世界遺産である奈良の春日大社で、修学旅行生123名全員による、自分達の手作りの棗を使っての献茶式を行った。校長が代表して献茶し、生徒は、棗、茶杓を校長にあわせて一斉に心を合わせて清め、全員が感動のうちに献茶式を滞りなく実施できた。



(献茶式開始の儀式)



(全員で帛紗をたたみ、棗を拭く)



(茶を点てて神官に差し上げ、控える)

「クラス別茶会」、「交流茶会」、「献茶式」を実施しての生徒の感想

「クラス別茶会」に参加した3年生の感想(抜粋)

- ・友達とともに茶会が出来て、とても楽しかった。(旅館の方とも一緒できた)
- ・京都の旅館で茶道が出来て良かったです。
- ・雰囲気もいつもと違って良かった。
- ・みんなで静かな時間を過ごせて良かったです。
- ・夜の茶会は、なんか不思議な感じがした。
- ・本格的な感じがした。(学校でやるときとは違う気がした。)
- ・普通の修学旅行では、出来ないことが出来たので良かった。(多数)

「交流茶会」に参加した生徒の感想

- ・他の中学校との交流茶会が出来て、とても感動したし、誇りを感じました。
- ・みんな自分達より下の学年なのにしっかりしていて驚きました。
- ・校内に茶室があって立派な学校でした。
- ・西京高校と普通では出来ない茶会が出来て良かったです。今後も西京高校の生徒たちを見習い、練習をがんばっていきたいと思います。
- ・すごくきれいな茶室があってうらやましかったです。

「献茶式」に参加した3年生の感想（抜粋）

- ・「世界遺産に献茶ということで感動しました。」(多数)
- ・とても誇りを感じた。
- ・すごく清々しい気持ちになりました。
- ・一生に一度しかない貴重な体験ができた。(多数)
- ・最初で、最後かもしれない献茶式が出来て良かった。
- ・献茶式を行って緊張したけれど、終わった後、落ち着いた気分になった。
- ・神が、僕たちみんなを見てくれている感じがしました。
- ・時間は、校長先生のおかげでとても短く、とても思い出に残るものになった。
- ・とても安らかな気持ちになったり、改まった気持ちになった。
- ・参加しませんでしたでしたが、とても厳かな気持ちになりました。

4 成果と課題

(1) 成果

日本の伝統文化「茶道」を授業で学び、さらに授業の延長である修学旅行で、「交流茶会」、「クラス別茶会」に参加したことにより、茶道の良さ、楽しさを体感出来た。

世界遺産である奈良「春日大社」で自分達の作った菓を使い、厳かな中で献茶式に参加したことにより、修学旅行が、より深く意義あるものとなり、感動体験を通して、各自の感性が磨かれた。

(2) 課題

校長が、どのような方策により、次の学校経営者に茶道の有効性を伝え、生徒に根付いた伝統文化「茶道」の良さを絶やさないようにしていくかが課題である。

おわりに

伝統文化「茶道」を教育活動に取り入れたことにより、一人一人の心が耕され、ひいては学校課題の解決につながるなど多くの成果もたらされた。さらに修学旅行での他校との「交流茶会」や「世界遺産」である「春日大社」で献茶式を行ったことは、生徒の心に、得難い体験と感動をもたらすことができ、一人一人の感性が磨かれ、各自の品格が高められた。

今後は、継続して「茶道」を教育活動に取り入れ、伝統文化「茶道」の良さを地域に発信し続けるとともに、生徒の心を耕し続けていきたい。

また、今後出来る限り、学旅行先での「茶道」体験に継続して取り組み、生徒の感性を磨き続け、伝統文化「茶道」を学校文化の基盤として定着させ、学校の品格を高めていきたい。

『心に響く修学旅行のあり方』

—平和への想いを歌声にのせて in広島—

佐野市立西中学校 第3学年主任 飯塚雅美
第3学年副担任 元田勝章

I はじめに

- 1 佐野市の紹介
- 2 学校紹介

II 修学旅行を広島へ

- 1 ねらいは・・・
 - ・これからの国際化の時代を担う子供たちに「平和教育」は必要である。
 - ・平和について「心に響く」体験をすれば、将来に生きるはずだ。
- 2 課題は？
 - (1) 事前の準備は？
 - (2) 行程は？
 - (3) 当日の広島での内容は？
 - (4) 保護者への説明

III 事前の準備

- 1 目的の確認
- 2 事前の準備
 - (1) 事前の「平和学習」
 - ・総合的な学習の時間に調べ学習やビデオ視聴
(原子爆弾とは、原爆の恐ろしさ、佐々木禎子さんの生涯など)
 - ・他教科との連携
 - (2) 「大地讃頌」の練習
 - ・大地讃頌の曲の背景歌詞の理解
 - ・練習風景

IV 実施へ

- 1 行程
- 2 目的を達成するために
 - (1) 広島での「平和学習」
 - ・平和記念公園ボランティアガイドさんからの説明
 - ・平和記念資料館の見学
 - (2) 広島で「心に響く」体験を
 - ・被爆体験記朗読会で原爆詩を聴き、朗読する。
 - ・原爆の子の像の前で折り鶴を奉納する
 - ・「大地讃頌」の歌に平和への想いをのせて
(詩の朗読を聴いた後で) (原爆の子の像の前で)

V 最後に

- 1 広島への修学旅行を振り返って
 - (1) 事後の学習
 - (2) 生徒の感想より
- 2 今後の成果と課題

『心に響く修学旅行のあり方』

- 平和への想いを歌声にのせて in 広島 -

佐野市立西中学校 第3学年主任 飯塚雅美
第3学年副担任 元田勝章

はじめに

1 佐野市の紹介

佐野市は、栃木県の南西部に位置し、平成17年度に佐野市、田沼町、葛生町が合併し、人口12万の栃木県第4位の都市になった。関東平野の北端に位置し、緑豊かな森林や美しい清流など自然環境に恵まれ「水と緑と万葉の町」というキャッチフレーズがある。はるか昔は、平将門の討伐やムカデ退治伝説



で有名な藤原秀郷公の居城であった「唐沢山城」をかかえた城下町でもある。そして現在では、北関東自動車道と東北自動車道がクロスする周辺の佐野新都市地区には、佐野プレミアム・アウトレットやイオンショッピングセンターなどの大型商業施設が進出し、「物流拠点の都市・交通要衝の地」となっている。食べ物もおいしく、佐野ラーメンとイモフライで有名な町でもある。

2 学校紹介

生徒数380名、14学級の中規模校で、佐野市の西側に位置し、田園に囲まれた学校である。足尾鉾毒問題で天皇陛下に直訴した田中正造の生誕の地でもある。学校目標は、日々の授業や学級経営を基盤に、学校目標達成に努めている。私たちの目標は - 1自ら学び考える 2自他を尊重する 3たくましく生きる - の3つである。

特色ある学校行事としては、「日光例幣使街道物語」という30数キロを全校生徒が歩くという行事がある。江戸時代の主要な街道であった日光例幣使街道を、江戸時代の人々が歩いたのを偲びながら全校生徒が歩くのである。部活動もさかんで、特に男子バスケットボール部は栃木県大会で連続4回優勝している。その他テニス部や剣道部、バレーボール部でも県大会の上位入賞を果たしている。また歌声の響く学校で、毎年秋に行われる合唱コンクールに向けて、朝や昼休みや放課後に、歌声が響いている学校である。



修学旅行を広島へ

1 ねらいは・・・

(1) これからの国際化の時代を担う子供たちに「平和教育」は必要である。

紛争の絶えない現代社会にあつて「平和」について考えることはますます重要になってきている。そんな中、日本は世界で唯一の被爆国であり、世界に「核の恐ろしさ」について発信する役割を担っている国である。広島を訪れ平和について考えることは、これからの「日本人として」大切なことである。日本の伝統文化を中心に学んできた修学旅行から、「平和」を考えていく、現代の修学旅行のあり方について考える必要がある。

また、栃木県の高校の修学旅行は沖縄や海外に変化しており、このままでは多くの生徒が広島を一生涯訪れることはないであろう。「平和教育」という意味からも広島への修学旅行は意義あるものであると考えた。

(2) 平和について「心に響く」体験をすれば、将来に生きるはずだ。

写真や映像を通してでなく、被爆地である広島を訪れ見たり聞いたりする「貴重な体験」は、深く生徒の心を揺さぶるはずである。また、被爆体験詩の朗読を聞くことは、実際にその地で起こった原爆投下時の状況や恐ろしさが肌を通して伝わってくるはずである。

そんな感情を抱きながら原爆に関する歌を広島の地で歌えば、歌を通して感情移入をし、生徒の「心に響く」はずである。

感受性の多感な十代に、広島に行き原爆の恐ろしさについて、肌でじかに感じることは、きっと「生徒の人間形成に」大きな影響を与えるはずである。

2 課題は？

(1) 事前の準備は？

「平和教育」とは何をすればいいのか？

まず、教師が広島のことや平和のことを知る必要があると考え、該当学年の教師数人で、下見に行った。広島で何をすればいいのか、何をすると感動的な修学旅行になるのかなど、講演会や先進校の視察なども検討した。

特に、総合的な学習の時間の調べ学習のあり方について、各教科の平和に関する単元と教材の確認と関連指導について、ビデオなど映像を利用した学習について、インターネットなど情報機器を利用した学習のあり方などの工夫を検討した。

「心に響く」体験をするには「歌」と結びつけては？

「大地讃頌」を広島で歌うことを考えた。「大地讃頌」は、混声合唱のためのカンタータ「土の歌」の中の第7章という一部分で、広島に落とされた原爆と平和についての歌である。静かですっきりとしたテンポの曲で、原爆を悲しみ平和を願った歌である。その歌を、いつからどのように練習するか、どこで歌うといいのか、どのように歌うと感動的な歌声になるか、などを考えた。大地讃頌を広島で歌ったときに、歌詞に自分の感情のせて「歌声で表現」できるようにすることを目標とした。

(2) 行程は？

その当時、栃木県下で広島に修学旅行に行っている中学校はなく、いくつかの課題が考えられた。まず、栃木県佐野市を出発して広島に着くまでに、約6時間が必要である。広島までは、東京駅から新幹線で4時間かかる。京都から広島へは1時間半必要である。広島、京都、奈良の3カ所を回るのに、どのような行程がいいのか旅行会社のアドバイスも受けた。

第1案 - 初日に一番遠い広島まで行く。

- ・ 1日目(広島) 2日目(京都) 3日目(奈良)のコース
- ・ 1泊目(広島) 2泊目(京都)に宿泊

《メリット》

- ・ 初日に一番遠いところに行き、徐々に戻ってくるというコースで安心感がある。最初が一番長い移動なので、最初の移動が終われば気分的にも肉体的にも楽になる。
- ・ 長い移動時間を3日間に分散できる。

《デメリット》

- ・ 2日目の京都の滞在時間が6時間ぐらいしかとれない。

第2案 - 初日に広島まで行って、その日のうちに京都に入る。

- ・ 1日目(広島) 2日目(京都) 3日目(奈良)のコース
- ・ 1泊目(京都) 2泊目(京都)の京都に連泊

《メリット》

- ・ 2日目の京都の滞在時間を朝から夕方までたっぷりとることができる。
- ・ 2泊とも同じ宿に泊まるので、宿の移動の手間が省け、荷物も移動する必要がない。

《デメリット》

- ・ 長い移動時間が1日目に集中してしまう。合計移動時間は10時間にも及ぶ。1日目に広島を見学したあと京都に帰ってくるので、京都着が夜遅くなってしまう、生徒の体力を消耗し健康面が心配である。

第3案 - 初日に京都に行って、二日目に広島に行く。

- ・ 1日目(京都) 2日目(広島) 3日目(奈良)のコース
- ・ 1泊目(京都) 2泊目(京都)の京都に連泊

《メリット》

- ・ 長い移動時間を3日間に分散できる。
- ・ 2泊とも同じ宿に泊まるので、宿の移動の手間が省け、荷物も移動する必要がない。

《デメリット》

- ・ 2日目は、広島へ行きと帰りに2回新幹線に乗らなければならなくなり、合計の新幹線の乗り降りの回数が増えて、費用が増える。

【決定】 - 第1案に

- ・ 京都の滞在時間が短いので、広島の宿泊先は駅の近くにとり、朝早く広島を出て、京都に入れるようにした。京都の見学はタクシーを利用し、短い時間で効率よく回れるようにした。

(3) 当日の広島の内容は？

広島での活動時間は6時間である。見学の場所は、原爆ドーム・平和記念資料館と2カ所あり、体験談は、被爆証言講話と被爆体験記朗読会がある。

原爆ドーム 説明をしてくれるガイドさんはいないか？

原爆ドームと平和記念公園は、ガイドさんなしで班別で見学する方法とガイドさんの説明を聞きながら見学する方法がある。原爆の恐ろしさなどガイドさんから話を聞いて、知識を「知る」ことに重点をおいた。

【決定】 - ボランティアガイドさんを旅行会社を通じて依頼した。

- ・原爆ドームについて説明があったほうが、ただ漠然と見ているよりも分かりやすい。

平和記念資料館の見学方法はどうか？

団体を案内してくれるサービスは館内では行っていない。ヘッドホンの音声ガイド（有料）がある。班別に見学し、原爆の恐ろしさなど、知識を自主的に「学習する」ことに重点をおきたい。

【決定】 - 班別に、展示の説明を読みながらゆっくり回るように指示した。

- ・音声ガイドは、説明を読めば分かるので頼まなかった。広島での唯一の班別行動の時間で、班で感想を述べ合いながら見学するようにした。

被爆証言講話 or 被爆体験記朗読会、どちらにするか？また会場は？

被爆証言講話は、被爆された方が自分の体験談を話してる。実際に体験したことを聞くという、広島に行かなくてはできない貴重な体験となる。かなり、高齢の方が多い。

被爆体験記朗読会は、詩の朗読が中心で、プロの朗読家が体験記と詩を朗読を聞き、生徒もいくつかの詩と一緒に朗読する。話し方はプロなので、とても上手に朗読する。

会場は、ホテルで食後に行う方法と昼間ホールで行う方法がある。

朗読詩を聴きながら、「心で感じる」ことに重点をおきたい。

【決定】 - 被爆体験記朗読会と会場を予約した。

- ・朗読会は、プロの話し手をお願いした。

(4) 保護者への説明は？

- ・保護者会で、説明し理解を得る
- ・学年通信で、説明し理解を得る
- ・入札説明会への保護者代表の参加

修学旅行タイムテーブル

時の流れ	教師の準備	「平和教育」関係	歌「大地讃頌」関係
1年生9月	おおまかなコースと宿地の決定		
1年生10月	入札説明会		
1年生11月	入札業者決定		
1年生3月	教師による広島の下見		
2年生9月	被爆体験講話の予約	広島平和新聞作成	
10月			
11月			講話「大地讃頌について」 大地讃頌練習
12月			3年生との合同練習
1月			発表（スキ学習にて）
2月		佐々木禎子さん生涯についてレポート作成 千羽鶴作成	発表（立派にて）
3月		京都除良の調べ学習	
3年生4月		修学旅行クイズ	
5月	修学旅行		発表（修学旅行にて）
6月		修学旅行新聞 修学旅行俳句	
3月			発表（卒業式にて）

計画作りと事前の準備

1 目的の確認

(1) 「平和教育」

- ・これからの国際社会で、原爆と平和について考えることは、必要なことである。
- ・世界で唯一の被爆国である日本は、核の恐ろしさについて世界に発信する役割を担っている。

(2) 「心に響く」

- ・ガイドさんの話を聞いたり、平和記念資料館を見学を通して、原爆と平和について学習する。＝「知る」「学習する」
 - ・被爆体験記朗読会を聴いて、自分で詩を朗読し、心に感じる。＝「感じる」
 - ・「大地讃頌」の歌詞に自分の感情をのせて歌声で表現する。＝「表現する」
- 感受性豊かな10代の時に、経験させることで、平和への想いを心に刻む。

2 事前の準備

この事前の学習をしっかりとやると、広島に行く意義が分かり、感動の度合いが変わります。2年生の9月から準備は始めました。

(1) 事前に行う平和学習

総合的な学習の時間に調べ学習

平和記念資料館で原爆についての本を購入し調べ学習に活用した。インターネットも活用し、各自がテーマに沿ってレポートをまとめ、掲示した。特に佐々木禎子さんについては、鶴を折ったり原爆の子の像を訪れたりするので、全員がレポートに沿って学習を行った。

- 調べ学習のテーマ 「原子爆弾(ファットマンとリトルボーイ)とは？」
(資料2) 「原爆まえの広島と破壊された広島は？」
「原爆を作ったのは誰か？」
「なぜ広島と長崎なのか？」
「なぜ原爆でたくさんの人が死ぬのか？」
「原爆被害の後遺症とは？」
「貞子さんと原爆の子の像」
「遺品は語る」

映像を通して学習

テレビのNHKスペシャルなど「広島原爆」や「平和」についての番組があったので録画し、事前学習の資料とした。また、市販のビデオも購入し学習の教材とした。

- ビデオ教材 「ヒロシマに一番電車が走った」
「夏服の少女たち」
「語り部シリーズ・ヒロシマ」
「はだしのゲン」

他教科との連携

- ・国語「君はヒロシマを見たか」
- ・英語「Lesson 4 Sadako and thousand paper cranes」
- ・社会「広島歴史」「京都・奈良歴史」

(2) 大地讃頌の練習

2年生の10月から始まり、何度も何度も繰り返して練習するようにした。歌詞の言葉を一つ一つを噛みしめながら、感情を込めて歌うことが目標である。広島の地で、平和への想いを歌声にのせて歌いたい。

なぜ「大地讃頌」なのか？（「土の歌」「大地讃頌」歌詞 資料5）

大地讃頌は反戦と平和への願いを込めた歌であり、大地を讃える歌である。作詞者の大木惇夫さんは、広島出身で親戚や知人などたくさんの人を原爆で失い、二度とこのような悲惨なことが起こらないことを願ってこの曲を作った。合唱ボランティアの方をお願いして、1時間の講話という形で、まず、大地讃頌の成り立ちと歌詞を理解した。

合唱の練習風景

1週間に1時間ある選択音楽の時間を使って、約半年にわたって練習した。合唱のボランティアの先生に歌唱指導をお願いした。



(ボランティアの先生に指導を受けながら)



(選択音楽の時間で)

発表は合計4回

スキー学習(1月) 立志式(2月) 修学旅行(5月) 卒業式(3月)

約半年に及ぶ練習の間に、発表の場面を2回作り、徐々にレベルアップしていった。スキー学習では、宿泊所の皆さんに感謝の意味を込めて、立志式では、保護者の皆さんに感謝の意味を込めて歌った。数え切れないほど歌い、歌詞の言葉が血となり肉となるようにした。不思議とこの歌を歌うと、聞いている人は涙を流すのが印象的であった。ちなみに、大地讃頌は卒業式でも歌うので、合計4回の発表になる。西中の伝統になりつつあり、生徒にとって、『中学時代＝大地讃頌＝広島』という記憶が、心の奥に深く刻まれるであろう。



(スキー宿泊学習で、2年1月)



(立志式で、2年2月)

実施へ

1 行程

5 / 20	佐野町前集合・出発	(両線)	小山駅	(なすの254号)	東京駅	(のぞみ103号)	広島駅	
(水)	5:10	5:48	6:15	6:38	7:24	7:50	11:58	12:20
	(広島鉄)	原爆ドーム前	平和記念公園(ガレキには案内資料)					
		12:35		13:00				
	アトリエ・ガレ (瀬戸内)		原爆の子の像(丸瀬)				世羅別館	
	16:00	17:00	17:30				18:00	
5 / 21	世羅別館	(広島鉄)	八丁堀駅	広島駅	(のぞみ152号)	京都駅		
(木)	7:20	7:45	7:55	8:24	10:07			
			(京都市内別行動外)	大津リハビリ				
			10:30~(7曜)	17:30				
5 / 22	大津リハビリ	(バス)	奈良公園(東大)	近鉄奈良駅				
(金)	8:00	9:45	12:45	13:10	13:35			
	(近畿鉄)	京者駅	(ひかり520号)	東京駅	(バス)	西中学校着		
		14:10	14:29	17:10	17:25	18:45頃		

2 目的を達成するために実施したこと

(1) 広島での「平和学習」

平和記念公園ボランティアさんからの説明

約1時間のガイドだったが、ボランティアさんの説明がとても分かりやすく、クラス全員が静かに耳を傾け、熱心に聴いていた。広島と原子爆弾と人々の生活についてなど、本や事前の学習では、得ることのできない貴重な話を聴くことができた。



(平和記念公園にて)



(世界遺産、原爆ドーム)

平和記念資料館の見学

館内の見学のために、約1時間の班別行動をとった。ゆっくりと展示の説明を読みながら、班員同士で感想を述べ合いながら、見学するように指示をした。原爆の恐ろしさや悲惨さを目のあたりにして、時にはハンカチで涙をぬぐっている生徒や、じっと展示物を見つめている生徒もいた。



(見学風景)



(黒こげの弁当箱)



(やけどのあと)



(廃墟の広島)

(2) 広島で「心に響く」体験を

被爆体験記朗読会で原爆詩を聴き、朗読する。(資料1)

午後4時から1時間の朗読会でした。静まりかえった雰囲気でない、感動は伝わらないので、静寂の中で心と耳で聴くようにさせた。途中、朗読を聴きながら泣き出す女生徒が何人もいて、感動的な朗読会でした。たくさんの生徒が涙を流しながら詩の朗読を聴くという不思議な光景にホールは包まれた。この広島で実際に起こった事実だということが、その土地の空気とともに見事に伝わった。広島に来ないと絶対にできない経験である。



(詩の朗読)



(生徒による詩の朗読)

原爆の子の像の前で折り鶴を奉納する

千羽鶴は、1クラス30人で千羽鶴を作った。4クラスなので合計4000羽の折り鶴を奉納した。鶴を折るときに佐々木禎子さんと原爆の子の像について、事前にワークシートを使い学習した。鶴を折るのは、約3ヶ月かかった。



(原爆の子の像にて)



(千羽鶴の奉納)

「大地讃頌」の歌声に想いをのせて。

(1回目) 被爆体験記朗読会で、原爆詩を聞いたあとに歌う。

朗読会の後にホールで歌った。朗読会で多くの生徒が涙を流し、泣きながらの大地讃頌は感動的な歌であった。詩を朗読して下さった方も涙を流しながら聴いてくれたのが印象的だった。



(アスティールザにて)



(涙を流しながら歌った大地讃頌)

(2回目) 原爆の子の像の前で、折り鶴を奉納した後に歌う。

朗読会の後、原爆の子の像の前に移動し、鶴を奉納した後にもう一度大地讃頌を歌った。歌詞の一語一語をかみしめながらの歌は、今までで最高の合唱になった。平和への想いを込めて歌った「大地讃頌」は、道行く人が思わず立ち止まって聞き惚れるほどの感動的な合唱であった。



(原爆の子の像の前で)



(平和への想いを込めて大地讃頌)

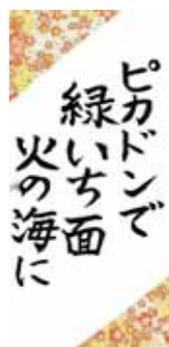
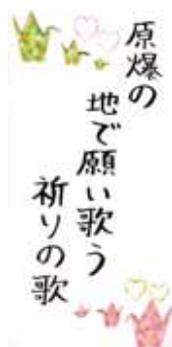
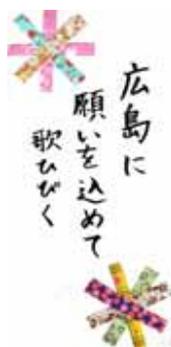
最後に

1 広島への修学旅行を振り返って

(1) 事後の学習

国語の授業で

- ・俳句の作成



総合的な学習で

- ・修学旅行新聞の作成 (資料3)

英語スピーチで

- ・広島への修学旅行をテーマにスピーチコンテストに参加した。(資料4)

(2) 生徒の感想より

【M.S 女子】

平和記念資料館はテレビで見ると違い、実際に見ると戦争の恐ろしさが強烈に伝わってきました。被爆者の方は、朗読会の間ははじめから終わりまでずっとあの頃の映像が映っていたのではないかと思います。ずっと苦しそうな顔をしていました。私たちが大地讃頌を歌ったときに、朗読ボランティアの方が涙を流しながら聞いてくれたことが印象的に残っています。

【H.M 女子】

平和記念資料館を見学したあと、詩の朗読を聞いて詩の中に込められた思いを想像してみるととても悲しい気持ちになりました。急に鼓動が激しくなり、もう一度詩を読んだら涙がこぼれてきました。一回目の大地讃頌は泣いていて歌えませんでした。原爆の子の像の前で歌った大地讃頌は、今までで一番気持ちを込めて歌いました。

【Y.A 女子】

資料館の展示物を生で見るとすごいと思った。原爆が落ちた瞬間に止まった時計とか...。なんか、考えさせられました。人間って...愚か者だなんて...。大地讃頌を歌ったときに、朗読をしてくださった方が泣いていたのを見たときには、歌で人を感動させるってすごいことだと思いました。

【H.U 女子】

被爆体験記と詩の朗読会では、読む人が感情を込めて読んでくれたのでとても悲しくなり、涙が出そうになりました。戦争がどんなに悲惨なものか、その時の被害状況や人々の心の様子がリアルに思い浮かびました。

【I.R 女子】

なにもかもが、すごく楽しかったです。広島では、詩の朗読会と原爆の子の像の前で歌った大地讃頌はみんなの心が一つになったような気がして、強く心に残っています。

【S.S 男子】

心に残っていることが3つあります。1つ目は、大地讃頌の歌です。平和記念資料館を見学し、詩の朗読を聞いた後で歌ったので、その気持ちを歌にのせて歌うことができたからです。今まで歌った大地讃頌とは、違った気持ちで歌うことができました。

【Y.E 女子】

平和資料館を見て、むかし日本でこのようなことがあったのだなと思うと悲しくなりました。今の私たちの生活がどんなに幸せで平和なのかが分かりました。

【H.N 女子】

始めて見た原爆ドームは、見ただけで鳥肌が立ち、原爆の恐ろしさが伝わってきました。詩の朗読は、その当時の人々の気持ちが伝わってきて背筋がぞくぞくしました。戦争のない平和な国であって欲しいと強く思いました。

【T.H 女子】

広島では、原爆の恐ろしさ、家族の大切さ、命の尊さを学びました。私には、父がいて、母がいて、姉妹がいることが当たり前に思っていました。でも、詩の朗読会を聴いて、当たり前でないことを知りました。このことをきっかけに家族や命を大切にしていきたいと思います。

2 今後の成果と課題

(1) 成果

- ・修学旅行のための平和学習は、2年生の9月から約9ヶ月にわたって行った。原爆の恐ろしさや、佐々木禎子の生涯など、「平和」について学習できた。
- ・平和記念資料館の見学や被爆体験朗読会など、現地広島の地で肌で感じた貴重な体験は、多感な生徒の心を揺さぶり生徒の「人間形成に大きな影響」を与えたはずである。
- ・広島への修学旅行は、心に響く感動的なものを作る可能性を秘めている。特に、涙を流しながら大地讃頌を広島で歌ったことは感動的であった。これから大地讃頌という歌を聞くたびに「大地讃頌＝修学旅行＝広島」そして「平和」という想いが心に湧いてくるであろう。

(2) 課題

- ・計画的な準備が必要である。平和教育については、調べ学習やビデオ視聴、他教科との連携など中学校入学時から計画的に行う必要がある。大地讃頌の練習については、歌詞の意味をよく理解し、歌の背景をよく理解し、時間をかけて練習する必要がある。
- ・広島への修学旅行は、静寂の中で行われる方がよい。心を揺さぶる感動は、静かな雰囲気の中で自分の心振り返ることによって沸き起こる。これには、生徒一人一人が心がけることと、教師による集団の統率が必要である。

3 終わりに

広島への修学旅行を計画するに当たって、関修委を利用しての新幹線は新大阪までしか乗れなく、関修委を抜けなければならなかった。そのために数々の問題に直面し、また近隣の学校で広島に行っている中学校がなく、暗中模索の中のスタートであった。さらに今年度は、出発直前に新型インフルエンザが関西方面に流行し、中止か、延期か、実施かに揺れた修学旅行であった。出発2日前に臨時保護者会を開き、保護者と検討するなど多くの困難を乗り越えての修学旅行であった。

しかし、生徒が涙を流しながら歌った大地讃頌は、私たち教師にも深い感動を与えてくれた。帰ってきてからの生徒の感想にも、深い感動と温かい心、そして戦争を憎み、平和を切望する強い思いが込められていた。広島への修学旅行が、生徒の心に大きな影響を与えたと信じている。平和を願う気持ちを育てることが、現代の修学旅行として必要なことであると思う。

今後、関修委で広島まで行ける修学旅行になることを切に望んでいる。



広島で平和学ぶ 修学旅行今年も

佐野・西中

折り鶴持参、歌も披露

【佐野】西中の三年生百五十三人が、十六日に修学旅行先の広島へ持参する「折り鶴」の制作に追われている。同校は昨年、市内で初めて平和教育の一環として旅行先に広島平和記念資料館を選んだ。今回も六カ月前からグループごとに毎週一時間、壁新聞をついたり、歌の練習を重ねるなど準備を進めてきた。(長茂男)

これまで市内の中学の修学旅行は京都、奈良が中心だったが、同校は総合学習の中で平和教育をテ

準備に半年、16日出発

「ママに、戦争の悲惨さ平和の尊さを学んでもらおうと、「広島」も加えた。尾崎始校長は「修学旅行という節目の時に、人間的に成長できる機会があってもいいと思う」と説明する。

昨年は原爆の恐ろしさを伝える資料の前で、立ちすくんだり、被爆者の語り部の話に涙する子どもたちの姿があったという。「子どもながらに考えるものがある。これから成長していく上で大きな力になるはず」と尾崎校長。

今年は一泊三日の初日の十六日に、平和記念資料館や平和記念公園に足を運ぶ。当日は朗読ボランティアの話や、公園内の「原爆の子の像」に折り鶴をささげ、命の尊さを歌った「大地讃頌(さんしょう)」を像の前でアカペラで歌い上げる。

修学旅行実行委員会の斎藤彩さん(四)、田中那未さん(四)は「広島では教科書にはない面を、たくさん学べると思う」「戦争に関するニュースなどの見方が変わってきた」と話す。

広島平和記念公園の「原爆の子の像」にささげる折り鶴を手にする斎藤さん(左)と田中さん

(下野新聞 平成 19 年 5 月 12 日付より)

(資料 1) 被爆体験記朗読会

被爆体験記 (三好妙子)

三好妙子さん、当時9歳。東千田町の自宅で被爆しました。被爆直後、誰かにつれられて生き延びましたが、そこで母と永遠に別れることになりました。

八月六日、家の廊下に座っていた。その時、稲妻のような光が頭上を通り過ぎ、真っ暗になり、やがて明るくなった時、母、祖母、私の三人は、吹き飛ばされ、床下に落ちていた。

からだじゅう、ガラス片が、つきささり、切りさかれ、血しぶきが吹き出していた。母ののどには大きな穴があき、言葉を発するたびに、その穴から赤黒いメントイコのようなものが垂れ下がった。私は、泣くこともものを言うことも忘れ、黙ってそれを見ていた。母は、近くにあった布で、私の身体にその布を裂いて、必死に結んでくれた。苦しい息を吐きながら、一滴の血でも止めてやりたい、というように。その母の手は真っ赤で、ぬるぬると血で光っていた。

「火が回ってくるぞ。早く逃げろ。」と叫ぶ声が出て、私は誰か男の人の脇にかかえられた。「お母アちゃん。」始めて私は叫んだ。その人は、私を抱いて、ガレキの上を電車道へ向かった。母と祖母が、ガレキの向こうに見えなくなってゆく。母が、真っ赤な手をかすかに振るのが見えた。それが、母と私の最後の別れでした。

電車道は、黒こげの人が皮膚をぶらさげて、血で塗りつぶされた身体で、ハダシで、黙って逃げている。不思議と静かだった。

川土手で、真っ赤に燃えさかる空を見ながら、一夜を明かした。まわりに、中学生らしい黒い人形のような人達が、たくさんころがっていた。

「お母さん」「お水をください」「熱いよう」その声も、だんだん小さくなり、やがて息絶えていった。淋しくも恐ろしくもなかった。みんな人の形をした感情のない塊でしかなかった。傷だらけの身体が痛みを感じたのは、三日ぐらいたって、収容所で血のりをついた布を傷口からはがされたときだった。思いっきり泣いた。そして、そのまま意識を失った。

気がついたときは、戦争が終わっていた。でも、その日から私の苦しみが始まった。身体中につきささったガラスの破片、傷口をはい回るウジ虫。そして、毎日母を呼び、子供の名前を呼びながら死んでいくまわりの人達。そんな収容所での苦しい日々。板の上に寝かされて、私は、母との最後の別れの記憶だけは、毎夜鮮明に浮かんで来た。夜空の美しい星を眺めながら、幼い私は母を思い出し、毎夜静かに泣いていた。

あれから五十年。両親や兄を原爆で失い、自分は学徒動員に行っていて一人生き残った主人は、思い出すのがつらいのか、決して、あの日のことは語らない。私も思い出したくなかった。でも、言い古された言葉だけれども、戦争がどんなに悲惨なものか、こんな話が信じられない今の子供たちに、どうしても知って欲しい。そして、この平和がいつまでも続く事を祈りながら、ペンをとりました。

How my school trip changed me

What do you think about nuclear weapons ? Some people think that they are terrible. Some think they are necessary for the state. Or some people say, 'I have never given much thought to nuclear weapons. People may think in different ways. But I state clearly, 'We must not have any nuclear weapons _____ anywhere.'

Every summer we have a lot of opportunities to learn about atomic bombs on TV and in the newspaper. Since they were dropped 64 years ago, which was long before I was born, I just thought that they were awful. But now I can think much more seriously. My school trip to Hiroshima changed me.

In May, I went to Hiroshima and visited the Peace Memorial Museum. Everything I saw there was terrible. The Atomic Bomb Dome, many cruel pictures that showed the terrible power of the bomb and poems written by victims. I could hardly look at those terrible things. A poem composed by a nine-year-old girl said that she lost her mother first, then she lost her father, brother and sister. She lost her entire family. The poem made me so sad that I could not stop crying. But at the same time, I felt ashamed that I did not take nuclear weapons seriously before. I didn't know exactly how the atomic bomb had changed Hiroshima.

Today there are more than 20,000 nuclear weapons in the world. More than 60 % of people in the USA think that dropping the atomic bombs was the right way to end the war. I get angry about those facts, but I can understand why they think in that way. They have never seen the Atomic Bomb Dome, they have never seen those cruel pictures, they have never read poems written by victims, they have never suffered from the aftereffects of radiation, and they have never lost their family because of nuclear weapons. That's why they aren't against nuclear weapons. They should see how the atomic bomb changed Hiroshima. I think that not knowing anything is more dangerous than the nuclear weapons themselves.

Mr Barack Obama, the president of the USA, made a speech on nuclear weapons in Prague. He wants a world without nuclear weapons. His speech has been in the spotlight since then. I have great expectations that more people will know that nuclear weapons are lethal and make the world terrible. And I believe that his speech can be a new step in the right direction. Now is the time to think about nuclear weapons seriously.

Thus my school trip made me who I am today. So I'd like to ask you again, 'What do you think about nuclear weapons ?'

修学旅行で変わった私

あなたは核兵器についてどう思いますか？

「とても恐ろしいものだと思う」「国家のために必要だ」「自分にはよくわからない」などと、その考えはさまざまでしょう。でも、私は自信を持って言いたいと思います。「核兵器はこの世界に絶対に存在してはいけない」と。

毎年夏になると、テレビや新聞で、原爆に関するたくさんのことを目にします。昨年までの私は、そういうものを目にしても、自分が生まれるずっと前のことだから・・・と、どこか他人事で、ただ単純に「怖いなあ」というくらいにしか感じるできませんでした。でも、今の私は違います。私の考えを大きく変えたのは、広島への修学旅行でした。

原爆ドームはもちろんのこと、平和記念資料館で目にした数々の恐ろしい写真、朗読会で聞いた被爆者に書かれた詩、そのすべては思わず目を覆いたくなるほどで、想像を絶して、悲惨でした。特に、9歳の女の子が書いた詩・・・血まみれになった母親と死に別れ、自分以外の家族が次々と死んでいく、地獄のような世界だった・・・を聞いたとき、私は涙を流さずにはいられませんでした。と同時に、核兵器に対して甘い考えしか持っていなかった自分自身が恥ずかしくなりました。

現在、世界中に2万発以上の核兵器が存在するのを知っていますか？ また、アメリカでは、国民の60%以上が、「戦争の早期終結のために、原爆投下は正しかった」と思っているのを知っていますか？ とても驚くべきことで、腹も立ちますが、私はその理由が少し分かる気がしています。なぜなら、核保有国の人々や、原爆投下が正しかったと考える人たちは、広島で起こったことを知らないだろうからです。原爆ドームを見たこともないし、あの悲惨な写真を見たこともないし、後遺症で苦しんでいるわけでもないからです。ましてや、核によって、愛する人を失っていないからです。原爆がもたらす悲惨な状況を知らないこと、たった1発の原爆で何年、何十年と人々が苦しみ続けなければならないことを知らないことが、核保有や「原爆投下が正しかった」と考える原因だと、私は強く思います。「知らない」ことが何より恐ろしいことなのかもしれません。

アメリカのオバマ大統領がプラハで「核なき世界」宣言をしたことで、世界中が核問題に注目し始めたと感じています。ひとりでも多くの人々が核問題に関心を持ち、核のもたらす数々の不幸を知り、核廃絶への意識を高めていくことが、世界平和の第一歩と信じます。そして、今こそが、世界中が核兵器について真剣に考えるときののだと思います。

修学旅行で大きく考えが変わった私ですが、皆さんにあえてもう一度お聞きします。「あなたは核兵器についてどう思いますか？」

(資料5) 「土の歌」「大地讃頌」の歌詞

作詞：大木惇夫 作曲：佐藤眞

第一楽章「農夫と土」

(人間が生きていくためには土を耕して種を蒔かなければなりません。自然の恵みや神秘
土への感謝、そして農夫の一日が見事に描かれています。)

耕して 種をまく土 人みないのちのかてを つくり出す土
耕して 種をまく者 農夫らの楽しみのたね 悲しみのたね
ともかくも たねがいのちだ
朝 星を見て 野良に出る 働いて 汗をひたいに汗して 夕星を見て帰るのだ
たねをはぐくむ土こそは たねをまく者の夢だ望みだ そして祈りだ
花咲き みのる 毎年の約束の不思議さよ

第二楽章「祖国の土」

(人は皆土に生まれ、土に還っていくという大地の素晴らしさが描かれています。)

ああ 大地 踏んでみて 寝ころんでみて たしかな大地
ああ まして祖国の土の尊さ
大空の星を仰いで 高く仰いで 歩け歩け しかし溝にははまるまい
山河よ さくらの 菊の 花咲く丘よ
顔上げて 堂々と踏みしめて
この土を踏みしめて この土を譲ろうよ 祖国の土を

第三楽章「死の灰」

(広島と長崎の原爆が取り上げられています。)

世界は絶えて滅ぶかと 生きとし生けるもの皆の 悲しみの極まるどころ
死の灰のおそれは続く
文明の不安よ 科学の恥辱よ 人知の愚かさよ
ヒロシマの また長崎の 地の下に泣くいけにえの霊をしをせば
日月は雲におおわれ 心はよみの路をさまよう

第四楽章「もぐらもち」

(第三楽章と同じく原爆の事と人間の愚かさが書かれています。)

もぐら もぐら 土にもぐって日のめも見ない
もぐら もぐら それでもおまえはしあわせだとさ もぐら もぐら
地の中の穴の暮らしが安らかだとさ もぐら もぐら
火の槍におびえる者は 死の灰をおそれる者は もぐらのまねをするそうなる
ほどな 土から出て来て土にと帰る もぐら もぐら どのみちそれが人間か
わっはっは わっはっは もぐら もぐら 笑ってやれよ人間を もぐら

第五楽章「天地の怒り」

(今度は人為的な災害では無く、天災について描かれています。)

自然の災害は人間の悪業への天罰なのかもしれません。)

雷だ いなづまだ 嵐だ 雨だ 洪水だ
土手が崩れる がけが碎ける 橋が流れる
樹も垣も根こそぎにされる 濁流が家を呑む 人をさらう
地の上に山脈があり 地の上に重みがある
地の下に燃える火があり 地の下に怒りがある
地の上に絶えずかぶさる人間悪よ 地の上のなげきは深い 長い年月
火の山の爆発だ 地震だ 火事だ
溶岩が流れる 尾根が崩れる 落ちる なたれる 火の海だ 修羅のちまただ
逃げまどう人の すさまじい叫び
うめき のけぞる ころがる
煙突が倒れる 時計台が崩れる 荒れ狂う町

第六楽章「地上の祈り」

(大地への想いと反戦の祈りが歌われている。大地の恩寵を感謝し、大地の平和を祈ります。)

美しい山河を見て 美しい花を見て 大地のこころを信じよう
恩寵を自然にうけて感謝しよう
ああ 戦争の狂気をば 鎮めたまえ
剣の乱れ 爆弾の恐れを さけたまえ
天意にそむく動乱を おさめたまえ
ああ 戦争の狂気をば 鎮めたまえ
地の上に花咲く限り よろこんで日ごと営み 悲しみも耐えて生きよう
ああ 栄光よ ああ 地の上に 平和あれ

第7楽章 『大地讃頌』

(母なる大地に限りない感謝と祈りをささげ、平和を祈っています。)

母なる大地のふところに われら人の子の喜びはある
大地を愛せよ 大地に生きる人の子ら その立つ土に感謝せよ

平和な大地を 静かな大地を 大地をほめよ たたえよ土を
恩寵のゆたかな大地 われら人の子の 大地をほめよ
たたえよ 土を 母なる大地を たたえよ ほめよ
たたえよ 土よ 母なる大地を ああ たたえよ大地を ああ

関東地区公立中学校修学旅行委員会「研究発表会のあゆみ」

昭和41年以来、次の研究発表会を実施した。（敬称略）

回	年度	発表者 県・学校名	講師	研究内容・講演内容
1	昭和41	増淵 増雄	栃木・泉が丘中	・修学旅行のカリキュラムについて
		吉沢庸之進	千葉・柏中	・修学旅行の安全対策
		関根武之進	埼玉・黒浜中	・修学旅行の保健衛生について
2	42	高畠 栄治	茨城・赤塚中	・修学旅行における事故の発生と対策
		根岸 幸治	群馬・昭和東中	・中学生の関西修学旅行の実施について
3	43	宮本 常一	武蔵野美術大	講演 「日本の宿の変遷と修学旅行」
		荒幡 義輔	埼玉・本太中	・修学旅行の問題点の教育的思考
		小沼 常治	東京桜町高校	講演 「修学旅行における見学指導の在り方」
		君島 光夫	栃木・南犬飼中	・栃木県における修学旅行の実態
4	44	小泉 義	茨城・水戸五中	・安全実施のための運営と問題点
		高田 福松	埼玉・幸手中	・今後の修学旅行の在り方
		君島 光夫	栃木・南犬飼中	・生徒の手による修学旅行
		本間 康一	千葉・川間中	・特別活動としての学校管理上の問題点
5	45	現地研修会（京都）		
6	46	宮本 常一	武蔵野美術大	講演 「修学旅行における望ましい観光の在り方」
		人見 芳正	栃木・箒根中	・小、中、高の関連の中で
		塩入安三郎	栃木・鹿沼西中	・わかくさ号で行こうとしたのに
		兵頭 ヤス	栃木・田沼東中	・新幹線を利用して
7	47	樋口 清之	国学院大	講演 「歴史の真実」
		高橋 武司	千葉・柏中	・より効果的な修学旅行について
		高田 福松	埼玉・幸手中	・修学旅行引率費負担の現状と公費負担
8	48	佐藤 政次	茨城土浦日大高	講演 「歴史と暦」
		高田 福松	埼玉・幸手中	・修学旅行の意義と目的
9	49	樋口 清之	国学院大	講演 「旅と情報伝達 忍者の正体」
		菊地昌一郎	埼玉・加須北中	・オリエンテーリングを取り入れた修学旅行の実際
10	50	萩原 進	群馬郷土史家	講演 「群馬の風土と人」
		谷 正久	群馬・古巻中	・群馬県の修学旅行の現状
11	51	神坂 重光	茨城・古河二中	・本校における修学旅行の企画運営
		糸川 妙子	栃木・藤岡二中	・我が校の修学旅行の理論と実際 - 自主の気風を目指して -
12	52	坂田 次雄	千葉・松戸三中	・修学旅行における道徳教育の実践
13	53	吉田 貴	茨城・水戸二中	・充実した修学旅行を目指して
		潮池 ルミ	埼玉・蕨東中	・修学旅行における観察学習を効果的にするために - しおり作成と活用 -
14	54	生方実太郎	群馬・多那中	・集合教育を取り入れた修学旅行 - 生徒の主体的な取り組み -
		阿部 茂	群馬・新治中	・有意義な修学旅行にするために - 新幹線における車窓教育 -
15	55	苅部 正夫	栃木・久下田中	・有意義な修学旅行にするために - 奈良公園におけるグループ別活動 -
16	56	天田 和之	埼玉・岡部中	・東北修学旅行を実施して
		平田 幸平	埼玉・日進中	・総力を挙げての修学旅行の運営 - 大宮市立中学校長会 -
17	57	鈴木 勝	千葉・松戸四中	・東北へ修学旅行を実施して - 生徒のアンケートをもとに -
		小川 辰雄	千葉・吾妻中	・生徒の自主プランによる修学旅行
18	58	岡野 久	茨城・永山中	・連合による修学旅行の効果的なあり方を求めて
		青木 英	茨城・見川中	・生徒を生かし育てる修学旅行を目指して
19	59	高橋 哲夫	文部省教科調査官	講演 「修学旅行の今日的課題」
		福原 昭	群馬・中之条四中	・本郡修学旅行の現状と課題
		福本長治平	群馬・富士見中	・よりよい修学旅行の在り方を求めて

回	年度	発表者 県・学校名	講師	研究内容・講演内容
20	60	高橋 哲夫	文部省教科調査官	講演 「自己教育力を育てる修学旅行」
		滝田 潔	栃木・横川中	・修学旅行を通じての自己啓発
21	60	松本 三郎	栃木・壬生中	・本県修学旅行の現状と課題
		片山 悦男	栃木・宝木中	・よりよい修学旅行の在り方を求めて
22	61	西川裕二郎	千葉・南行徳中	・みちのくの修学旅行
		村田小夜子	千葉・大洲中	・修学旅行を省みて
23	62	小日向勝美	埼玉・朝霞四中	・洛中班自由行動による見学活動
		川上 次雄	埼玉・大宮第二東中	・自由性を生かした修学旅行
24	63	高橋 哲夫	文部省教科調査官	講演 「学習指導要領改訂の方向について」
		宮本千代子	茨城・土浦第六中	・生徒自身の生徒の手による修学旅行
		川上 徹	茨城・日立豊浦中	・お互いを高め合うグループ別見学学習
		須藤 和彦	茨城・下館中	・生徒と教師がともに作り、触れ、感じる修学旅行
25	平成 元	<群馬県厚生年金会館>		
		高橋 哲夫	文部省教科調査官	講演 「新学習指導要領に於ける特別活動」
		後藤 秀夫	群馬・小野上中	・達成感の充実を目指した修学旅行
26	2	<プラザインくろかみ>		
		渡辺 康隆	栃木県教委副主幹	講演 「研究成果の確認と今後の課題」
		松岡芙久子	栃木・小山美田中	・主体性を育てる班別行動
		大滝 伸一	栃木・宇都宮国本中	・あたらしい修学旅行の在り方を考える
27	3	<志津コミュニティ・センター>		主題 「集団の中で自己を生かし協力しあう修学旅行をもとめて」
		渡部 邦雄	文部省教科調査官	講演 「集団の中に自己を生かす修学旅行」
		斎藤 正行	千葉・国分台西中	・リーダー養成を中心にすえた修学旅行
		山田 守人	千葉・柏五中	・班別にテーマをもつ修学旅行をつくるには
28	4	<埼玉会館>		主題 「教育性を高める修学旅行をめざして」
		井桁 孝	全修協修旅部長	提言 「学校週五日制と修学旅行」
		大磯 宏	埼玉・所沢富岡中	・主体性を伸ばす班別行動
		藤川喜久男	埼玉・狭山東中	・体験学習を通して生き方を学ぶ東北修学旅行
29	5	<茨城県立青少年会館>		主題 「自主的に活動し、自ら学ぶ修学旅行」
		井桁 孝	全修協修旅部長	提言 「新学力を培う修学旅行」
		秋田 昌彦	茨城・五所ヶ丘中	・生き方、在り方を学ぶ体験学習への援助指導の試み
		安島 一之	茨城・赤塚中	・体験を通して自らの生き方を考える修学旅行への取り組み
30	6	<プラザインくろかみ>		主題 「主体的に活動し、自ら学ぶ修学旅行」
		大槻 達也	文部省環境教育専門官	講演 「修学旅行における生徒の自主性」
		田上 富男	栃木・市貝中	・三年間を見通し自ら学びとる力の育成を目指す修学旅行
		古田 真隆	栃木・豊郷中	・研究テーマの設定を中心に生徒自らが計画した修学旅行の実践
31	7	<群馬県生涯学習センター>		主題 「主体性を育てる修学旅行」
		高橋 哲夫	文教大学教授	講演 「これからの学校教育と修学旅行」
		今成 保治	群馬・渋川北中	・集団の行動力を高める修学旅行
		田村 正紀	群馬・池田中	・主体性を育てる修学旅行の実践
32	8	<市原市勤労会館>		主題 「主体的に活動し、自ら学ぶ修学旅行」
		鈴木 俊幸	千葉・土中	・自主性を育む修学旅行の取り組み
		眞野 義幸	千葉・木刈中	・生徒の自主性を高める修学旅行のあり方

回	年度	発表者 県・学校名 講師	研究内容・講演内容
33	9	<浦和市民会館> 森嶋 昭伸 文部省初中局教科調査官	主題 「主体性を伸ばし、行動力を高める修学旅行」 講演 「学校教育の転換と修学旅行への期待」
		田村 俊明 埼玉・鷲宮中	・生徒の知恵と発想を大事にし、主体的に生きる力を育む修学旅行
		金子 桂一 埼玉・鴻巣西中	・自主的活動をめざした修学旅行
34	10	<水戸市民会館> 岩原美智枝 茨城・日立坂本中	主題 「主体的に活動し自ら学ぶ修学旅行」 ・自ら学ぶ態度を育てる修学旅行をめざして
		坂入 秀範 茨城・下館北中	・主体的に活動し、実践力のある生徒を育てる修学旅行
35	11	<プラザインくろかみ> 高塩 博美 栃木・宮の原中	主題 「生きる力」をそだてる修学旅行 ・体験学習を取り入れた修学旅行
		片川 慶子 栃木・毛野中 三芝 直美 〃	・自らの生き方を求める体験学習としての修学旅行
36	12	<群馬県生涯学習センター> 森嶋 昭伸 文部省初中局教科調査官	主題 「生きる力」を育てる修学旅行 講演「これからの学校教育と修学旅行」
		高橋 隆雄 群馬・新治中	・自主的に取り組む班別行動をめざした修学旅行
		埴田 栄一 群馬・長野原西中 田中 充弘 〃	・自ら学び、自ら考え、生き生きと活動する修学旅行 - 総合的な学習の時間を活用して -
37	13	<アミュゼ柏> 田淵 実 千葉・西志津中学校 佐藤 卓 〃	主題 「生きる力を育てる修学旅行」 ・体験学習を取り入れた班別自主学习
		池田 保 千葉・湖北台中学校 澁谷 善武 〃 水戸 勝英 〃	・自ら課題を発見し、自ら計画し、自ら検証する修学旅行を目指して - 修学旅行を総合的な学習と位置づけての実践 -
38	14	<さいたま市民会館おおみや> 渡辺 勝徳 埼玉・神泉中学校 関口 陽子 〃	主題 「みんなで創ろう21世紀の修学旅行」 ・自ら学び自ら考える力の育成を目指す修学旅行
		梅津 稔 埼玉・南高麗中学校	・総合的な学習の時間の視点から見た修学旅行
39	15	<プラザイン・くろかみ> 生田目 薫 栃木・国本中学校 岩崎 昌美 〃	主題 「みんなで創ろう21世紀の修学旅行」 ・自己決定の場面を生かした修学旅行
		田中 弘子 栃木・栃木西中学校 佐藤 宏行 〃	・体験的な学習を通して見つめなおす自分とふるさと再発見の旅
40	16	<ホテルレイクビュー水戸> 棚井 義広 茨城・水府中学校 古内 勝己 〃	主題 「みんなで創ろう21世紀の修学旅行」 ・修学旅行における国際交流学習の一端 - 「Why don't you come to Suifu?」 郷土紹介のガイドブックを携えて -
		一色 三千男 茨城・第四中学校	・集団づくり及び総合的な学習の時間の場としての修学旅行の在り方 - 中学校3か年の旅行・集団宿泊的行事の実践的取り組みを通して -
41	17	<水上館> 小淵 誠 群馬・薄根中学校 須田 秀昭 〃	主題 「修学旅行における『学び』の創造」 ・見て、聞いて、体験して発見する私だけの京都・奈良 - 体験的な活動を通して成長する生徒を目指して -
		栗原 和彦 群馬・金島中学校	・生徒の自主的活動を育み伝統文化とふれあう修学旅行 - 総合的な学習の時間における実践的取り組みを通して -
42	18	<流山市生涯学習センター> 根本 晃男 千葉・みつわ台中学校 平野 正春 〃	主題 「修学旅行における『学び』の創造」 ・ふれあい、体験、大人から学ぶ山形の旅 - 3年間を見通したキャリア教育を核として -
		村山 義則 千葉・南部中学校	・日本文化探究をとおした生徒の向上
43	19	<さいたま市民会館おおみや> 大倉 芳樹 埼玉・東中学校	主題 「子どもの未来を拓く修学旅行の役割の研究」 ・生きる力をはぐくむ修学旅行 - 体験学習を通して自分の将来・地域を見つめる旅 -
		桜井 信雄 埼玉・埼玉中学校	・過去・現在・未来、そして自分を見つめる修学旅行 - 総合的な学習の時間とリンクした実践的な取り組みを通して -

回	年度	発表者 県・学校名 講師	研究内容・講演内容
44	20	<ホテルレイクビュー水戸> 飯野 兼一 茨城・第五中学校	主題「感動ある修学旅行の実現」 「学級団結をねらいとした旅行的行事の実施」 - 体験学習を通して、自分の将来・地域を見つめる旅 -
		鈴木 由香子 茨城・内原中学校	「結束力を高め、個が生きる修学旅行のあり方」 - 絆を深める体験活動を取り入れた自分発見の旅 -

表紙写真：京都市立下京中学校と茶会(上三川町立上三川中学校)

第45回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会紀要

平成21年11月16日

発行 関東地区公立中学校修学旅行委員会
財団法人 全国修学旅行研究協会
[事務局] 〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-6-8
TEL 03-5275-6653 FAX 03-5275-6653
E-mail shuryo@h2.dion.ne.jp
URL <http://shugakuryoko.com/>